

『太平寶卷』と紹興の宣卷―書承のことは・口承のことは―

松家裕子

現在、文字のかたちで伝えられている文學に、口頭のことを記録したとされる作品や、口承の世界から生まれたとされるジャンルがある。それらは音聲であった時、どのようなありかたをしていたのか。それを知ることが、作品の解釋やジャンルの理解を助けるに違いない。何より、そのありさまは、きつと生き生きと魅力的なものであつたろう。しかし、音聲は生まれては消える。音聲を保存する方法は長い間なく、歴代の文字の使い手たちは口承の世界を文字で記録することにはほとんど關心をもたなかった。そこで、過去のそうした文學について何か言おうとすると、たいてい實證主義の壁の前で、立ち止まるか、引き返すか、または危険を冒して壁に體當りするか、いずれかの選擇を迫られることになる。

寶卷というジャンルがある。宗教的な場から生まれ、散文と韻文が交互に現れて、多くは物語りをもつ。明代以降多くのテキストが創られ、抄本（寫本）、刊本（木版本）と民國期の石印本が現存する。同時に、寶卷を歌い語る「宣卷」が、現在も中國のいくつかの地域において、人々の生活の中、生きて行われている。すなわち、書承されるテキストの口承の世界におけるありかたが、觀察可能なジャンルである。

本稿がとりあげるのは、その寶卷のうち『太平寶卷』である。清の光緒年間の抄本が残り、また民國初期に石印本が出版されている。刊本の存在は確認されていない。『太平寶卷』は有名な寶卷ではない。

その内容も、一見、よくある女人受苦ものである。しかし、この寶卷は、浙江省紹興郊外の農村地區で現在も行われている宣卷の、重要な演目である。紹興の宣卷の老藝人者S¹⁾さんは、『太平寶卷』を「寶卷の王」²⁾と言う。別の老藝人者A³⁾さんは、文化大革命によつて寶卷が焼かれた時、師である名人の口傳をひそかに文字に記録した。その八種の演目の一つが『太平寶卷』だった。Aさんの口からは、この寶卷が演者を選ばない名作だとも聞いた。これらは、『太平寶卷』に、口承の世界にあつて書承ではわからなくなつた意味や價值があることを示している。本稿は、その意味や價值を、文獻調査と紹興における實地調査を踏まえて説明することを目的とする。書承のテキストを口承の世界に戻した時、どのようなことが見えてくるのか。その一例を示したいと思う。

一 『太平寶卷』の概要

まず、『太平寶卷』の内容を、民國二年（一九一三）上海文益書局刊行の石印本によって、あらまし紹介する。

明の正徳年間、湖廣湘陽府襄陽縣北門外杏花村に聞蓮という富豪がいた。聞蓮は五十餘歳、同い年の妻王氏との間に、十三歳の一人息子、官寶がいる。聞蓮は官寶のため、趙春豹という清貧の鰥夫を家庭教師に招くことにし、また春豹を訪ねて見かけたその一人娘、素貞を息子と結婚させたいと考える。王氏は、素貞が貧しく母のないことを理由に、これに反対する。官寶は童試を受けて合格し、正式に素貞と婚約、怒る王氏を下女の冬梅がなだめる。まもなく聞蓮が病み、急ぎ官寶と素貞の婚禮が行われ、数日後、聞蓮は坐化昇天、趙春豹も世のはかなさを感じ、出家した。

王氏が受験を促したので、官寶は懷妊した素貞と涙で別れて上京、狀元及第して東宮侍讀に任ぜられ、不本意ながら都に留まった。留守宅では、王氏が冬梅とともに素貞を虐待。素貞が孝養を盡くし、王氏が病めば醫者を呼び、藥を煎じ、天醫廟に祈り、自らの腿の肉を割いてスープを作るまでしたにもかかわらず、素貞を家から追いだした。

素貞は母の墓前で縊死しようするが、二人の女性の幽霊に助けられ、夢に現れた母の教えにより都に夫を訪ねる。途上、素貞は山東で口入れ屋の朱六娘に騙され、富豪、莫廣才に妾として賣られたが、莫家の好意で養女となり、令嬢の莫文琴と姉妹の契を結び、やがて男兒を出産した。

聞官寶は三年の任が満ち、願いかなって湖廣巡按となつて歸郷、官寶の歸宅を知つた冬梅は書童とともに家財を奪つて逃亡し、強盜に殺された。王氏は官寶に素貞は死んだと嘘をつき、官寶は悲しんで妻を弔つた。まもなく王氏は急死、地獄で冬梅の受苦のさまを見るなどし

て非を悔いて蘇生し、地獄で知つた素貞の居場所を、眞實とともに官寶に告げた。

官寶が山東の莫家を訪ね、夫婦は團圓。素貞の促しによつて莫文琴も官寶の妻となり、三人は湖北に赴き王氏にまみえた。王氏は念佛と精進の生活を始める。皇帝は聞官寶から一部始終を聞き、官寶と素貞を褒賞し、また素貞を助けた二人の幽霊を吉祥如意永保太平の神に封じて、百官に神殿の造營を命じた。

官寶と素貞の息子、聞忠孝は余東林先生の教えを受け、莫廣才が善行により授かつた息子、莫文龍とともに上京して受験、忠孝は狀元、文龍は探花で及第し、皇帝の肝煎りでそろつて名家の令嬢と婚約した。王氏は修行の功満ちて昇天、夫妻三人も信仰の生活に入り、教化に盡くした。玉皇大帝は仙童玉女を遣わして、聞家と莫家の一同を仙界に迎え、兩家の子孫は富貴となつて繁榮した。

『太平寶卷』全卷のあらすじは以上である。母のない貧家の善良な娘が身分違いの結婚をする。夫は都へ受験に行き狀元及第して高官となるが、留守宅にそれは知らされない。妻は姑からいびられた末に流離する。その後、姑は地獄に落ちて回心する。紆餘曲折を経て夫婦は團圓、信仰の實踐によつて昇天し、子孫は榮える。これらはいずれも、寶卷にしばしめられる内容である。儒佛道が混淆した三教合一の思想を背景に日常道徳が稱揚されるのも、清後期の多くの寶卷と特にかわりはない。

二 紹興の宣卷について

現代中國で行われている宣卷のうちよく知られるのは、甘肅と江蘇のものである。紹興の宣卷は知名度、研究の進展いずれにおいても

二者に及ばない。目下、参照しうる專著は、『紹興宣卷』（浙江攝影出版社、二〇二二）のみだろう。日本では、磯部祐子、上田望、小南一郎、松家に研究がある。^③民間藝能の常として、紹興の宣卷についても起源・沿革をはじめ、不明なことが多い。ここでは先行の研究と實地に得た知見に基づき、本稿の趣旨に照らして必要なことがらを紹介したい。

過去の紹興の宣卷について情報を提供する資料は、見つかつていないようである。清以前の地方志や、民國期の文章にもまとまった記録のあることを聞かない。ただ、紹興の人、周作人が幼時、隣家の宣卷を聞いたと書いている。^④紹興の宣卷が社會の表舞臺に現れ、その存在が廣く知られるようになったのは、一九九〇年代以降のことだろう。磯部祐子による調査報告は、その最早期のものと思う。^⑤改革開放の進展につれて盛んに行われるようになり、宣卷を主たる収入源とする人も増えた。ただ、宣卷が職業だと自稱する人はいない。宣卷は家傳の藝ではない。子弟關係もあるにはあるが、緩やかなものようだ。高度な専門性は必ずしも求められず、熟達した藝能者にも、さほどではない人にも出会う。

宣卷はふつう四人で行う。^⑥三人や五人の報告もあるが、實見していない。性別は問わない。男女混合のグループもあるが、これを不淨とする意見も聞いた。グループの結びつきはあまり強くない。依頼を受けた藝能者が、その日参加できる人を集めて行う方式である。

上演の場所は、寺廟と個人の居宅を主とする。開店・開業の際にも行うという。宣卷では、四人が正方形の八仙卓の三邊に着席する。四人にはそれぞれ役割がある。「魚位」は木魚を叩く指揮者で、リーダー役である。「醒位」は、木魚を助けて「醒木（拍子木）」をばちで叩く。

ただし醒木を使わないことも多い。「書位」は「唱本（臺本）」である寶卷を繰る。宣卷では卓上に寶卷一冊を置き、現在進行中の頁が常に開かれる。素人が宣卷を始めやすい理由の一つもここにある。「茶位」は自身を含む藝能者に適宜、茶を供する。これとは別に、登場人物ごとの役の分擔もある。一人稱の科白と三人稱の描寫、いずれについても、當該の人物の擔當者が歌い語る。

八仙卓の残り一邊は、神佛のために空ける。宣卷は必ず願文起草し、神佛を招いて行われる。魚位が願文を書き、あわせて依代である「神位」を作成する。寺廟では神佛の前に八仙卓を置いて北側を空け、そこに神位を南向きに置く。個人宅では逆に八仙卓の南側を空け、そこに神位を北向きに置く。いずれも、神位の前には蠟燭と線香が上がり、供物が供えられ、多くの紙錢（紙錠）が準備される。

寶卷の内容に入る前に、文字化されない寶卷外の歌によつて神佛が招来される。宣卷の音楽は、「宣卷調」と呼ばれるひとつの短い旋律を、木魚の伴奏で繰り返す。時に弦樂器が加わるが、これは「色をつけた」後發のものである。宣卷調では、押韻箇所および散文と韻文が交代する箇所すべてに、「南無佛、南無阿彌陀佛」の四人による唱和が插入される。宣卷調のほか、幽霊が登場する時に「鬼調」、女主人公の悲しい述懐に「越劇調」が入ることもある。發音はすべて紹興の方言でなされる。ただし、唱本は基本的に官話で記され、散文つまり科白に紹興の方言の語彙が混じる。

物語りが完結すると、神佛への歸依と祈願が歌によつて示され、魚位が願文を読み上げる。そして神位、願文と紙錢が焼かれ神佛の元へ届けられる。『太平寶卷』全卷の宣卷の調査は、二〇一三年十一月三日に行つた。朝八時に始まり、途中、中國式の長めの晝休憩をはさん

で、十六時に終了した。調査した他の宣卷も、時間はほぼ同じであった。

「宣卷は神と人とを樂しませる（娛神娛人）」ということばをよく聞く。しかし、紹興で聴衆のいる宣卷に出會ったことがない。過去、宣卷に娯樂の性格があつたことは後述する。しかし、今日それは後退し、宗教儀禮としての性格だけが残っている。ただ、宗教儀禮といつても、特定の宗教・教派や特定の神佛への歸依を促したり、表したりするものではない。宣卷は、人々が生活の中で必要だと感じた時、家族で、數人で、また多數でお金を出しあい、藝能者に携帯電話で連絡をとつて行ふ、ごく近しい營なみである。

三 『太平寶卷』のテキスト

次に、『太平寶卷』の現存するテキストについて、圖書館に残る本、紹興の藝能者所有の本の順に紹介したい。

圖書館の藏本は、車錫倫『中國寶卷總目』（以下『車目錄』）によって知ることができる。以下、年代順に示す。

1 光緒十二年（一八八六）、王培抄本、二冊。南京師範大學圖書館藏。全卷閱覽、一部撮影（全卷不許可のため、八葉分を除いて撮影）。以下「光緒本」と呼ぶ。

2 宣統元年（一九〇九）抄本、二冊。東北師範大學圖書館藏。全卷閱覽、撮影。以下「宣統本」。

3 民國二年（一九一三）抄本、二冊。山東大學圖書館藏。館員の方に直接會つて依頼したが、後日、所在不明と回答があつた。

4 民國二年（一九一三）、上海文益書局石印本、二冊。上元李節齋校正。『車目錄』は「文元」とするが「文益」が正しい。上海圖書館

藏本を全卷閱覽、撮影。以下「文益石印本」または「石印本」。

5 民國二十年（一九三二）、蔣萬榮抄本、二冊。上海圖書館藏。全卷閱覽、撮影。以下「民國抄本」。

6 民國二十四年（一九三五）、上海惜陰書局石印本、二冊。Web上で公開されている、澤田瑞穂舊藏早稻田大學本を全卷閱覽。

7 舊抄本、二冊。上海市評彈團資料室藏。未調査。

1の光緒本は乾集・坤集の各封面右上に「光緒拾二年」、左上に太字で「太平」、その下に乾集、坤集と墨書する。圖書館の整理票に「王培抄本」と記すが根據は不明。また、年の後、寶卷の通例では「月日」の字を空白を伴つて記すが、この書にはない。年代を騙る後代の本かとも疑つたが、その可能性は低い。理由は二つある。一、封面の「光緒拾二年」を本文中の同じ字と對照した時、筆跡が同じと認められる。二、圖書館の整理票に一九五八年十月一日付「紹興市統一商事憑證」が付され、ここに「十本」、「貳元」と記される。十冊二元の書に年代を騙る細工を施したとは考えにくい。

2の宣統本は元集・亨集、利集・貞集、計二冊。各封面裏の扉に、右「宣統元年仲春月（空白）日抄録」、中央太字「太平寶卷」、左下「山陰章平鑑書」と記す。山陰は紹興を指す。

5の民國抄本は、乾集・坤集、各封面に、右「民國式（字體ママ）拾年杏月（空白）日吉立」（坤集は「榴月」）、中央「蔣萬榮」、左「太平寶卷」乾集、坤集と記す。

次に紹興で閱覽した、宣卷藝能者所有の『太平寶卷』三種を紹介する。いずれも手書きである。紹興には、一つの寶卷に相當數の異なるテキストが存在する。藝能者の數だけテキストがあるのではないかとも思わせる。たとえば、紹興で頻繁に宣卷が行なわれる演目に、「三

包」がある。これは、『割麥寶卷』、『賣花寶卷』、『賣水寶卷』、三つの包拯ものの總稱である。調査のさい演目を指定しないと、この三包が選ばれることが多かった。これまで閲覽した三人の藝能者が所有する四種の三包のテキストは、みな異なっていた。圖書館の藏本をあわせ見ても、それぞれ相違がある。

寶卷は、一方ではお経と同じように扱われ、藝能者は繼承したことばを尊重する。これは韻文に顯著である。しかし一方で、藝能者は獨創する。それには藝術上の目的とともに、經濟的な理由もある。宣卷による収入は、高い評價を得れば増える。唱本の出來不出來は、當然、評價に大きく影響する。そこで藝能者ごとに工夫をし、テキストは一種の企業祕密になる。貸借も皆無ではないが、氣輕には行われない。寶卷のテキストが固定性と流動性の兩方を指向するのは、このためである。

『太平寶卷』は紹興の宣卷の重要な演目で、流通している抄本も相當數にのぼるだろう。三種はそのごく一部にすぎないが、ここからわかることを考えたい。テキストの名稱は、各藝能者の名などに由來する。Aを缺くのはこのためである。

1 紹興B抄本（略稱「B本」） 安昌鎮の宣卷藝能者Bさん所有のテキスト。上一冊のみで下を缺く。Bさん本人によるペン書き。カレンダー（年代不明）の裏紙を封面にし、そこに「B置用」「太平宝卷上」と記す。

2 紹興C抄本（「C本」） Bさんが全卷の宣卷の際に用いたテキスト。上下二冊。原本ではなくコピー。未知の人Cさんの落款があった。このテキストを撮影中、Bさんの家族が別人の落款に気づき、これを墨で抹消した。他人のテキストを用いるのは名譽でないことがわかる。

各封面に「太平寶卷」上集、「太平寶卷」下集と記す。

3 紹興D抄本（「D本」） 本稿の初めに紹介したAさんが参加する、安昌鎮の宣卷グループD班の藝能者で、Aさんの兄が所有するテキスト。上下二冊。墨書による原本。各封面に「太平卷 上本」、「太平卷下本」。この書のみ、末尾に「公元一九八〇年农历九月 G敬録」と年月と書寫者の名（所有者とは別人）を記す。

『太平寶卷』について、以上八種のテキストを閲覽、對照し、またC本による全卷の宣卷の觀察、録畫、および藝能者への聞きとりを行った。これによってわかったことを、先にここにまとめておきたい。對應する後續の節とその小題をあわせて記す。

1 閲覽した『太平寶卷』のテキストは、圖書館藏本含め、すべて紹興で行われていた宣卷の唱本、あるいはそれに基づいて作られたものである。「四『太平寶卷』と紹興の宣卷」。

2 閲覽した『太平寶卷』のテキストは、「石印本系」と「非石印本系」（または「光緒本系」）、大きく二つの系統に分けることができる。

「五『太平寶卷』テキストの二つの系統」。

3 過去、『太平寶卷』の宣卷においては、テキスト外のことばが大量に生みだされていた。「六 書承のことば・口承のことば」。

4 紹興の宣卷の重要な機能に、孤魂の慰撫・救済とそれによる禳災がある。『太平寶卷』はこの機能を特に顯著に有する寶卷である。「七『太平寶卷』宣卷の機能」。

なお、テキストの對照は、B本が「下」を缺くため、前半を中心とする。また、石印本二種の間にも若干の異同があるが、その對照は本稿の趣旨ではないので、初發の文益書局本によって石印本を代表させる。

四 『太平寶卷』と紹興の宣卷

『太平寶卷』が紹興で生まれたかどうかは確定できない。しかし、これが紹興で育った寶卷であることは確かである。宣卷の藝能者がもつ三種の抄本はむろん、圖書館藏の五種のテキストも、紹興の宣卷の唱本そのもの、またはこれに基づいて作られたものである。光緒本が紹興で購入され、宣統本に「山陰」と記すことは既に述べた。しかし、すべてが紹興の宣卷に出ると考えるのには、より確かな根拠がある。それは、各本に紹興方言の語彙が見られることである。

『太平寶卷』中、これをよく示す部分を紹介したい。聞連（聞蓮）が自らの死が近いことを悟り、婚禮の舉行を趙春豹に告げようとする場面で、聞連、王氏、冬梅、趙春豹の科白がある。以下引用については、光緒本を（一）、宣統本を（二）、文益石印本を（三）、民國抄本を（四）、C本を（五）、B本を（六）、D本を（七）でそれぞれ括り、この順に示す。句讀はある本とない本とがあり、ここでは引用者が斟酌して付した。誤記と思われるものも含め、字體はできる限り原本に合わせた。光緒本による譯をはじめに示す。

聞連「おい女房や、趙先生を呼んできておくれ。話したいことがあると言つてな。」王氏「わかりました。冬梅はどこだい。」冬梅「ただいま。」王氏「書齋へ行つて、先生に來ていただきなさい。」冬梅「わかりました。お呼びして参ります。書齋に着いたわ。もし先生、旦那さまがお話があるとお呼びです。」趙春豹「参ります。」

〔圖〕吓、安人、你与我去親家到末、說我有話。〔主〕老身曉得。冬梅那里。〔參〕未哉。〔主〕到書房、請得親家末。〔參〕嘸。仰我去請得末。

『太平寶卷』と紹興の宣卷

已到書房。吟、先生、員外有話相請。〔參〕我未了。」

〔連〕吓、安人、你与我請親家進來、說我有話。王氏 老身曉得。冬梅那里。冬來哉。王氏 偈到書房里、不俚請得親家來。冬嘸。介末仰我去。行來已到書房。吟、先生、員外有吏相請。豹 我來了。」

〔外〕安人吓、你與我請親家到來、我有話講。旦曉得。冬梅、你快到書房、請先生到來。付曉得。冬梅來到書房說道。先生、員外有事相請。老生 我來了。」

〔參〕安人吓、你与我請親家到來、我有事商議。〔老〕曉得。冬梅、你快到書房、請先生到來。〔參〕曉得。先生、員外相請、有事商議。〔老生〕我未了。」

〔外〕安人、你與我請親家到來、我有話請講。旦冬梅、你快到書房去、請先生到來。丫曉得。冬梅來到書房說道、先生、員外有請。老生 我來了。」

〔外〕安人、我想医生不必去請。还是与我书房中去、請親家進來、說我有話。安老生曉得。冬梅、你到书房里去、請得冤家末。冬丫头曉得哉。行來已到書房。喂、师老爷、員外有事請你进去。春是。」

〔參〕安人、你还是与我叫親家進來、說我有話。〇嘸。冬枚、喏不我到書房去、不伊叫得親家末。〇曉得。行到書房。吟、先生、員外有事相請。〇我未了。」

引用中、方言と考えられる語に傍線を施した。これらのうち、「哉（了）」以下、相當する官話の語を注記する、「仰（讓）」、「羅里（哪里）」、「不（給）」、「俚・伊（他）」、「介末（那么）」は吳方言の語彙だが、紹興に限定されない。一方、D本に紹興方言特有の「喏」（你）があ

る。「喏」は多く「偌」と記し、宣統本「偌」も「偌」の誤記と推測される。また、感嘆詞「嘸」（同意を示す）、「唸（呼びかけ）」も紹興の方言であろう。光緒本、宣統本、D本がこれを含む。

寶卷の言語は書記言語であり、總體には官話を指向する。民間の抄本でも、科白も含め、官話の知識があれば概ね理解ができる。この部分、光緒本、宣統本、B本、D本の、主として王氏と冬梅のやりとりで方言が用いられている。石印本はここに紹興方言の語彙がない。上海で讀物として刊行された、書記言語としての性格が最も強いテキストであるから、これは自然なことだろう。しかし、民國抄本にも方言がなく、C本は「哉」のみである。これら三種には、感嘆詞を含まない共通点もある。このことは後の議論にかかわる。

宣卷の唱本であつたことは、人物名、役柄や「○」が注記されることからわかる。みな、主體となる人物の交代箇所にある。前述のように、紹興の宣卷では登場人物ごとの分擔がなされる。したがつて、これは上演の便のための處置であろう。光緒本と民國抄本は、人物名や役柄を朱の○で圍んで目立たせる。圖書館に眠るこれらの本も、やはり宣卷で使うために作られたことがわかる。宣統本の小字は見えにくそうだが、宣卷に用いられたB本とC本も小字で記すから、小字をもつて宣統本を宣卷の唱本でないと言うことはできない。D本の○も人物交代箇所であり、やはり宣卷のためのものだろう。熟練した使用者なら○だけでも用が足りる。石印本は、本文の字も小さく、字間・行間が詰まり、宣卷には向かない。役柄を記すのは、基づいた抄本を踏襲したものだろう。讀解の助けにもなる。

しかし、石印本、民國抄本が紹興の方言の語彙を含まないわけではない。王氏が一度目に病んだ時、診察に來た數醫者、包起（啓）發の

登場時、自述の科白を見たい。

わたくし包啓發、この町に住まいし、内外一切の病を治療いたします。今は運が向かず、一向に仕事がありません。それでも仕事があつたとして、わたしが参りますと必ずお陀佛。ああ、世間の奴らは頭ん中から口の先まで弱氣をくじき、みなわたしを「人殺しの包先生」と呼びまして、たちまちこの名が知れわたりました。まあ、つまらぬ話はよししましょう。

〔學生包起發、家住本城、崑治一切内外雜症。難末來里倒運、生意一点無分、若还有些生意、我洛一到必定送命。啖、一班人頭上嘴口實在來得勢利、都囑我包醫殺、一洛時囑出名者。難末閑話少說。〕

〔學生包啟發、家住本城、崑治一切内外雜症。難末來里倒運、生意一点無分、若还有些生意、我洛一到必定送命。啖、一班人頭上嘴口實才來得勢利、都囑我包醫殺、又一洛時囑出名者、難末閑話少說。〕

〔自家非別、包起發便是。家住城里、專醫一切内外雜症。難介來東到運、生意一点毫無、只交自我一到直脚送命。難介一班人頭上嘴口使喇得緊、都交我保醫殺我保醫殺、一叫兩叫、叫之出名者。閑話少說。〕

〔自家非別、包起發便是。家住城里、專醫一切内外雜症。難介來東到運、生意一点毫無、只交自我一到直脚送命。難介一班人頭上嘴口使喇得緊、都囑我保醫殺、一囑兩囑、得出名者。閑話少說。〕

〔自家非別、包起發便是。家住城里、專醫一切内外雜症。難介來帶倒運、生意一点毫無、只叫我一到直脚送終。難介一班人頭上嘴

口來得勢利、都囑我包医利保医利、一囑二囑、出名著。難沒閑話少說。」

【學生包啟法、家住本城、專治內外雜症產科傷寒。那末葛年把運道勿好、弄未失風、則我一到馬上送終。葛班人頭上嘴口未得勢利、啥个囑我包医杀ここ、一落時囑出名著。那末閑話少說】

《學生包起法、家住本城、內外一切雜症。難末未里倒運、生意一點无分、还有些生意吃得□（二字不明）、我咯方子一定送命、舌間上人嘴口实才勢力、都囑我包医杀ここ、一落時囑出名著。閑話少說。》

ここに見える方言のうち、「難末・難沒（現在）」、「來里（在）」、「來得（特別）」、「者（了）」、「个・葛（這）」、「難介（如此）」、「直脚（實在）」、「則（只）」は廣く吳方言に見られる語彙である。一方、「來東・來帶（在）」、「嘔（叫）」は紹興の特徴を示す。この「來東」、「來帶」が、石印本、民國抄本、C本に見える。石印本『太平寶卷』も、やはり紹興の宣卷の唱本に基づいて作られたことがわかる。

石印本の寶卷では、『烏金寶卷』、『梅花戒寶卷』が多くの紹興方言の語彙を含み、すでに古屋昭弘、王福堂らが、分析を行っている。紹興民間の抄本から石印本への動きは、偶然ではなく一つの流れとしてあったことになる。同じ時代、紹興から上海に出た文化を象徵するものに越劇がある。石印本の流れは小さいが、やはり紹興から上海への人の動きを背景としていたのだろう。全體には方言の使用を避ける石印本が、この部分、他の四種にない「來東」、「來帶」を使ったのは不思議であるが、これらが紹興の特徴を明確に示す語彙であることから、意識的に残した可能性もある。石印本の寶卷の期待された讀者には、故郷を離れ、上海で故郷の文化を懐かしむ一群の人々がいただろう。

そういう人たちのための一つの目印だったかもしれないと考えるのである。

五 『太平寶卷』テキストの二つの系統

石印本、民國抄本、C本三種の間で、方言の使用のしかたに共通した特徴があることを、前節の引用部分で見た。二つの引用箇所からは、また、他の四種に比べて、この三種の間で、字句の異同が少ないことも見てとられる。三種と四種の間には、字句の異同だけでなく、比較的大きな内容の相違もある。

たとえば、李忠なる人物の有無である。都に官を得て歸郷できなくなった聞官實は、この李忠に母と妻への手紙を託す。ところが乗った舟が嵐に遭って轉覆、李忠は落命する。石印本以下三種は、この内容をそっくり缺く。その結果、官實は留守宅を氣にかけるものの、いささか薄情な人間になっている。

全卷にわたって對照すると、『太平寶卷』のテキストがこれら三種と四種の二つの系統に分かれることが、より明確になる。ここでは、前者を「石印本系」、後者を「非石印本系」または「光緒本系」と呼ぶことにする。兩系統の區別は後の引用部分からも見てとられるはずであるが、ここに、見やすいものを、石印本系、光緒本系の順に記しておきたい。1聞家の當主を「聞蓮、號世良」とするか、「聞連、字世良」とするか。2聞家の所在地を「湘陽府」とするか、「襄陽府」とするか。3聞連の善行に言及しないか、するか。4趙春豹の出家先を東嶽廟とするか、靈峰寺とするか。

石印本は流通量が多く流通範囲も廣いことから、強い傳播力、影響力をもったに違いない。時間の前後を考えても、民國抄本（民國二十

年)は石印本(民國二年)を書寫したものであろう。民間で宣卷のために石印本『太平寶卷』が書寫された例は、江蘇張家港の沙上寶卷にも見られる。C本は、そうした抄本が、再び宣卷の實演のための加工を施されて成ったものである。

聞家に赴く際、趙春豹が娘の素貞に、清明節に歸宅する旨を告げる、韻文の一句がある。

〔定期回家過清明〕〔定期回來過清明〕〔定期回家還海明〕

〔定期回家還海明〕〔你在家中自當心〕〔訂期回來過清明〕

〔定期回來過清明〕。

小さな異同だが、兩系統の違いとC本の特徴を知らせてくれる。石印本の「還海明」は、「過清明」と形狀が似ることから生じた誤りであろう。民國抄本は石印本の誤記を踏襲する。しかし、C本は宣卷の藝能者の手で、意味の通る別の内容に變更されている。

翻つて四種を見れば、光緒本、宣統本からB本、D本まで、石印本の干渉を受けない系譜が、紹興の民間でつながっていたことがわかる。このことは、現在の紹興の宣卷の傳統が、光緒十二年までは確實に遡りうることを示す。過去の紹興の宣卷にかんする記録を缺く中、光緒本の存在意義は大きいと言ふことができる。

六 書承のことば・口承のことば

C本はこのように、石印本に基づきながら、宣卷の實演出である特徴をよく示す。聞連の命を受け、官實と素貞の婚約を進めるべく、聞家の小者が孫媒婆を迎えに行く、次の場面もその一つである。孫媒婆は婚約と婚禮の場面にかなり長く登場する、重要な脇役である。

(小者)「承知いたしました。お使い命受け迅速出立、仲人婆を出

迎えに、道中快速、婆の家に早着いた。」小者「孫さん、開けてくれ。」(仲人)「はいはい、ただいま。」二人は入つて(?)道を行く。一番花白(後述)。「着いた。」

〔曉得哉。〕④小使令命即行程、奉命前去請媒人、一路行程来得快、媒婆門首到來臨。孫媒婆、開門ここ。ここ來哉ここ。二人進門一路走。一番花白。到哉。〕

〔付曉得哉。小使令命即行程、奉命前去請媒人、一路行程來得快、媒婆門首到來臨。孫媒婆、開門。媒來哉ヒヒ。哈。大叔到來作哈。〕我奉聞府員外之命、請偕前去做个央媒押盤。媒既如此、仰我関之門。大叔請。媒媽ヒ請。行ヒ去ヒ。媒去ヒ行ヒ。到哉。〕

〔付小人曉得。行行去去、去去行行。噲、到者。噲、媒婆吓、開門。阿吓阿吓。二丑來哉來哉。噲、大叔、你到來何事。付我是聞府來个。昨日我家員外全唔說過之事、今日要行盤法品、特來相請過去。二丑如此就此動身。大叔請。付媒婆請。媒婆二人同出門、一路行程不留停、將身來到聞府首、家人進內報主人。〕

〔付小人曉得。行ヒ去ヒ。噲、到者ここ。媒婆、開門ここ。二丑來者ここ。噲、大叔、你到來何事。付我是聞府來个。昨日我家員外同唔說過之事、今日要行盤法品、特來相請過去。二丑如此就此動身。大叔請。付媒婆請。二丑媒婆二人同出門、一路行程不留停、將身來到聞府首、付家人進去報主人。〕

〔小人曉得。小使奉命急行程、去請媒婆到來臨、行來不到多少路、媒婆門首到來臨。媒婆白。媒婆小使一同行、一路行程不留停、將身來到聞府門、小使進內報主人。〕

〔使小人曉得哉。小使奉命急行、去到街坊請媒人、慢表小使在

路走、提表媒婆出坊人。咦、自家非別、孫媒婆便是。連日无得工夫、今朝空閑未里、勿如紡介线根花条没是哉。纺花椅子撿介把、关得房門紡棉花、媒婆正在花未紡、媒婆開門、忽听門外叫囉唆。媒婆開門ここ。ここ未哉ここ。喂、媒婆、時候勿早哉、勿如早点去。媒介没大叔請。使媒婆請。二人走出歇里亭、急忙忙向前行、不觉未到閨府首、家人进内报事情。」

《○曉得者。小使奉了員外命、急忙忙往前行、一路行程未得快、媒婆門首到未臨。媒婆、開門ここ。○未者。昨日喜鵲叫、好日在今早。吟、原来大叔到未、有舍貴干。○我奉員外之命、叫你前去有話。○如此煩勞大叔行路。○在我未、行去去。○去去行去。○到者。》

ここには各テキストの特徴がよく表れている。まず、石印本と民國抄本の類似がより明確になる。そして、これら二種にくらべ、小者と孫媒婆の應酬は、光緒本、宣統本、C本、D本では短く簡単に、B本では絲紡ぎの内容が挿入されて、逆に長くなっている。これはどのように説明できるだろう。

ここは、小者と媒婆、二人の道化役がやりとりをする滑稽な場面である。石印本が紹興方言を含む二人の科白を残したのは、おもしろさを保持するためだろう。四種の抄本が石印本より短い理由は、光緒本の「一番花白」、C本の「媒婆白」が教えてくれる。これらはいずれも、テキスト外の科白を挿入せよという指示である。C本を用いた宣卷では、この部分は唱本から約三分離れ、小者と媒婆の漫才風の掛け合いと、木魚の伴奏による媒婆の唱えごとが加えられた。同様の指示のない宣統本やD本も、宣卷に用いられれば同じことが行われたと推測できる。C本の婚禮の場面には「掛燈白」と「賓相白」、つまり提

燈に事寄せたり、自由に編まれたりする、媒婆の唱えごとの指示もある。「賓相白」の箇所でも、宣卷ではテキスト外のことばが約二分加えられた。また、光緒本は朱買婆登場の場面にも、「一番花白」と見える。

これらのことは、口承である宣卷に、書承である寶卷にないことばが、即興で加えられたことを意味する。こうしたことばは「花口」、これを挿入することばは「插花」と呼ばれる。紹興の宣卷で插花が盛んに行われてきたことは、『紹興宣卷』の記述^④、および老藝人者たちの藝と發言によつて確認できる。插花には「内插花」と「外插花」の二種がある。前者は物語りの内容の中で行われ、宣卷のことばを敷衍する。先に見たものは皆これにあたる。後者は物語りの内容から逸脱するものを指す。D班による『循環寶卷』全卷の宣卷では、約十分間の外插花が披露された。「牌九」というカードゲームの用語を用いた、語呂合わせの唱えごとであった。この插花を行なったAさんは、老練の名手である。Aさんは言う。過去、『太平寶卷』の宣卷には三日を要した。孫媒婆の花口だけで半時間。婚禮の場面は、掛燈四十分、迎賓十分、賓相に半時間かけた。後半には朱買婆の花口もある。宣卷の時間の約八割は花口だったと。孫媒婆、朱買婆、包起（啓）發、そして聞家の小者、冬梅、王氏。『太平寶卷』には插花を行い得る人物が多く登場する。これが、老藝人者たちがこの寶卷を名作とする理由の一つになっていることは間違いないであろう。

では、この引用部分でB本の内容が多くなっているのはなぜか。このテキストの他の部分を参考にして、これを解くことができる。

B本には、これ以外にも、他のテキストにない内容が多く見られる。顕著な例が、聞連の葬禮の場面である。光緒本は「公子此刻好傷心

（この時、坊ちやま心を傷め）から「入土爲安不必論（埋葬を済ませたことは言を俟たず）」まで、葬送のことを七言十句で述べる。宣統本、D本も同じ句数である。石印本系三種はこれが六句になる。ところがB抄本はここに七言六十七句の韻文と科白がある。七言句の主要部分は葬禮の數え歌で、前半に初七日から七日ごとに四十九日までの行事、後半に九艘の弔い舟の仕立てを、順に歌う。

B本には、また、病んだ王氏に素貞が孝養を盡くす場面に、他のテキストには出ない盲目の占い師、つづいて二人の物乞いが登場する。前者には二葉（半葉十行、行約二十二字）の科白、後者には半葉の科白と七言四十句が與えられている。外插花と呼んでよいものだろう。

B本については、冬梅が王氏をそのかす場面のみ、Bさんらによる宣卷を實見した（二〇一二年九月二十八日）。テキストで五行のやりとりが、快速二分間の掛け合いになった。これはどのようなテキストなのか。「下」の行方も含めて、Bさんに何度か質問したが、有用な答えが得られなかった。あるいは、江蘇吳江の宣卷藝能者で、本來記録されない寶卷のことばと上演上の留意事項を大量に文字に残した、朱火生氏の状況が参考にできるかもしれない。朱氏が記録を作った理由は、晩學であったこと、緻密な演出を目ざした実践していたこと¹⁶という。他の本になくB本にあることばも、本來テキストの外にあった宣卷のことばを、Bさんが自らの藝を高めるために記録したものではなかったか。それは、長い花口のすべてではなくとも、花口の一部だったり、絲口だったりした。B本は、石印本系はもちろん、非石印本の他の本からも見えなくなってしまうた、口承の世界のありさまを知らせてくれるテキストだと考えることができるのである。

花口に見られた、婚禮のさまざまな唱えごとや歌も、葬式歌も、盲

目の占い師の唱えごと、物乞いの掛け合いも、もともと人々の現實の生活の中で、媒婆や、葬式歌の歌い手や、占い師や、物乞いたちが行なっていた口の技に基づいたものだったろう。藝能者たちは、そうした既製の多様な口の技を借りて、宣卷のことばをそのつど創造していた。紹興の宣卷のテキストが、藝能者ごとと言つてよいほど多彩になった大きな原因も、口承の世界のこうした豊かな創造性にあると考えられる。

そして、B本が見せてくれるのは花口の世界だけではない。

七 『太平寶卷』宣卷の機能

寶卷の異同は、當然ながら科白に多い。しかし、韻文にも異同はある。それを見てみたい。場面は、趙素貞が王氏と冬梅によつて家を追われ、生母の墓前で自死しようとするところである。ここに、李華姑と朱瑞姑という、縊死した女性の幽霊が登場する。二人は自らの成佛のために身代わりを探しており、自死しようとする趙素貞を見つけて、はじめ争う。しかし、相談の末、後日の救いを得る道を選び、力をあわせて趙素貞を助ける。その幽霊の登場を示す一句である。

〔卷中另提一吊魂〕〔卷中另表一红神〕〔卷中另出吊死神〕

〔卷中另出吊死神〕〔卷中另出吊死神〕〔卷中另表一吊神〕

〔卷中到出一红神〕

石印本系は「吊死神」とし、非石印本系は相互に異なるが「死」の字を用いない共通点がある。相談がまとまり趙素貞を助けに行く際的一句では、二人の幽霊は以下のとおりに表される。

〔曼表吊神同去救〕〔慢表吊神同去救〕〔慢表二吊去相救〕

〔慢表二吊去相救〕〔曼表二吊去相救〕〔慢表吊神未相救〕

《慢表吊神去相救》

石印本系は「二吊」、非石印本系は「吊神」とし、兩系統で明確な區別がある。二人が趙素貞を助け、將來の濟度への願いを述べて去る場面、素貞が顔を上げて見てみれば、に續く一句はこうである。

〔原未都是二吊神〕〔原未卻是二吊神〕〔却是陰司兩吊人〕

〔却是陰司兩吊人〕〔（この一句無し）〕〔原未都是太平神〕

〔却是二吊死神〕

石印本系では「人」であるところ、非石印本系では「神」とする。

このうちB本の「太平神」の由來は、寶卷の終盤、皇帝が趙素貞を助けた功績を稱え、二人の幽靈を神に封じたところである。この内容は、「下」を缺くB本を除くすべてのテキストにある。

二人の縊死した神は人命を救い自ら望んで苦難を受けたので、吉祥如意永保太平の神に封じ、當該の地方官には廟と金像を造り、萬年にわたり尊崇參拜を受けるようにせよと命じた。

又封二吊神救命有功自愿受苦、封為吉祥如意永保太平、着地方官督造廟宇粧貼金身、受萬年香火。（宣統本による）

『太平寶卷』の石印本を讀んで、幽靈たちの重要さに氣づくのが簡単でないことは、澤田瑞穂が、この寶卷の梗概中、幽靈に言及していないことからわかる。¹⁸しかし、この二人は、ある意味でこの寶卷の主人公である。そのことを、題名が示している。

『太平寶卷』全卷の宣卷の調査を強く希望したのは、最初に會った時、Bさんのことから、この寶卷が「小目連」と呼ばれることを知ったからである。目連戲は言うまでもなく中國文化史を考える上で重要な作品群であり、この名には深い意味があると考えた。のちにBさん、そしてAさんも、『太平寶卷』の宣卷は、溺死者が出た時、その

魂を鎮めるために行うのだと教えてくれた。李忠の溺死もこれとかかわるのだろう。「小目連」は、この寶卷の宣卷に、目連戲の上演と同じく、孤魂、つまり横死した人の靈魂を慰め、それによって厄災を避ける機能があることを示していたのである。

『太平寶卷』の宣卷では、他の寶卷の宣卷にない儀禮が挿入された。宣卷の途中、Bさんが席を離れ、節分の豆まきの要領で、唱えごとをしながら米粒を撒いた。その後、手を振って追い拂う動作とお辭儀をして敬意を示す動作を交互に繰り返した。同じ時、黄紙（黄土色の粗末な紙）を折って作られた紙錢が焼かれた。宣卷の終わりに、金・銀紙で作られた紙錢が焼かれるのと對照的であった。この一連の動作は、みな孤魂のために行われたのである。紹興の宣卷では神位にさまざまな神佛の名が記される。觀音菩薩、包公、關公、城隍神、土地神など普遍的な神であることが多い。しかし、『太平寶卷』の宣卷において神位の中央に記されたのは、「三十三天 太平菩薩之寶座」の文字であった。先に引用した韻文の三つの部分で見た異同は、すなわち、非石印本から石印本系への、孤魂への神としての尊崇の薄弱化を示すものだった。逆に、三つめの引用部分においてB本のみが「太平神」としていたのは、このテキストが、口承の世界における『太平寶卷』の實態をよく反映していることの、もう一つの證だったのである。

『太平寶卷』に限らず、紹興の宣卷そのものに、孤魂の慰撫の機能があることもわかつている。たとえば、「三包」のいずれの作品にも、横死した魂とその救済の内容が含まれている。¹⁹二〇一五年三月六日に調査した「三包」の宣卷では、すべての儀禮が終わったあと、廟の外でやはり黄紙が焼かれた。「你们从哪里來回哪里去吧（もといた所へ歸ってください）」の意味があると藝能者が説明してくれた。だからこそ、

孤魂の慰撫の機能を顯著にもつ『太平寶卷』は、紹興の宣卷にとって重要な「寶卷の王」なのであった。

趙素貞が王氏の病氣平癒のために天醫廟で占いをする場面に、次の一句がある。

〔三拜虚空過往神〕〔三拜虛塘過往神〕〔三拜南海觀世音〕
〔三拜南海觀世音〕〔三拜南海觀世音〕〔三拜虚空過往神〕
《三拜虚空過往神》

石印本系が通りのよい「南海觀世音」とするところ、非石印本系は「虚空過往神」とする。この「虚空を過ぎ往く神」も、どこから來てどこに行くか知れない、孤魂を指すのだと考えられる。

おわりに

以上、『太平寶卷』という一つの寶卷について、目にしえたテキストト、全卷の宣卷、そして藝能者のことばから、わかったことを述べてきた。はじめに掲げた書承と口承の問題に即して言えば、石印本とこれを書寫した民國抄本は書承の性格を最も強くもち、光緒本と宣統本はそれより口承に傾き、B本が口承の世界に最も近く、口承のありさまをよく知らせるテキストだということになる。C本は書承の世界から口承の世界に引き返したもので、口承と書承の關係について別の方向から知らせてくれる。しかしながら、たとえB本であつても、そこに記されたことばは口承のことばそのものではなく、そのごく一部にすぎない。さらにいえば、今日觀察可能な宣卷のことばは、同じ口承のことばでも、往時の宣卷のことばに比べれば、分量も多様性も、かなりのものが失われている。

『太平寶卷』と紹興の宣卷のこの例において、口承から書承へと向

かう中で見えなくなつていったものを確認すれば、それは次の三つにまとめられるだろう。1方言、すなわちローカルなことば。2物語りから廣がつていくことば、あるいは物語りから離れていくこととすることば。これらを、それぞれ敷衍のことばと逸脱のことばと試みに名づけた。3宗教性、ないし聖性。明確な教義をもたないかもしれないが、しかし人々の意識に深く根付いていた信仰のことばが、テキストから姿を消していく。これら、特に1と2は、多様から規格化への流れと捉えることもできるだろう。

『太平寶卷』は石印本として刊行されたが、書承の文學として名作にはならず、時間によつて淘汰される可能性が高い。また、紹興の宣卷も、多くの口承文藝と同じく、衰微の道をたどつて⁽²⁾いる。現在では插花のない宣卷、插花ができない藝能者も多い。『太平寶卷』の宣卷が三日から一日になつて依頼者に不満はないのか、と尋ねたら、Aさんは答えた。「もちろん。お金が節約できるじゃないか。」

しかし、本稿の趣旨はこうした消極的な話をするところにあるのではない。逆に、書承のテキストの向こうに口承の世界を見たとき、わたしたちはそこに、ローカルなことばを含む、想像もつかないほどの多様なことば、敷衍と逸脱のことばがあつたこと、そして、テキストに残る痕跡は小さくとも、その文學を生み出した人々の切實な信仰があつたことを知つたのである。

過去についてわたしたちに與えられるのは、多くの場合、文字の記録だけである。實證主義は眞實に近づくためにあるが、しかし、もし荒つぽくあるいは誤つて運用し、いわゆる「文字づら」の情報だけをつなぎあわせたなら、それはわたしたちをかえつて眞實から遠ざける。目の前の文字テキストの背後に何があるのか。そのテキストはもとの

ありかたから何を捨てて成り立っているのかを、さまざまな方法で考える必要がある。本稿では、その試みの一つとして、藝能者が確かに發したが聴き手に届いてすぐ消えたことばと、燃やされた紙の上と人々の心の中だけにあつた信仰を、なんとかかすくいとろうとした。確かにあつたものを、無かつたことにすることはできない。記録されなかつた、記録の失われた多くの人々の聲があつたことをわたしたちは知っている。それらを拾い集めることによって、わたしたちの認識は十全なものに少しずつだが近づくことができるのだろう。

謝辭：

紹興の宣卷の藝能者をはじめ、本稿に基づいた調査に協力してくださつたすべての皆さまに、衷心より感謝を申し上げます。

本稿は、二〇二〇—二〇二四年度科學研究費研究「中國近世宗教文藝研究—寶卷を中心にして」の成果の一つである。

注

(1) 「藝人」という日本語は固定したイメージがあるため「藝能者」の語を用いる。當事者の意向や中國社會の状況に鑑み、藝能者についてはアルファベットによって示す。

(2) 實地調査については、以下の科學研究費報告書を参照。いずれも松家裕子・小南一郎・磯部祐子・栗木(藤田)佳美による。『中國近世唱導文藝研究—江南地域における實態調査』二〇一一。『中國江南唱導文藝研究—上演・テキスト・信仰—』二〇一四。『浙江金華口承文藝研究—語りもの藝能「金華道情」を中心に—』二〇一七。『中國浙江講唱文藝

研究—勸善・免災の機能から考える』二〇二〇。

(3) 王彪・馮健主編、羅小令・馬志友・王雷・沈瑩編著『紹興宣卷』浙江攝影出版社、二〇一二。磯部祐子「中國民間演劇の再燃」『高岡短期大學紀要』第十九號、二〇〇四、一五九—一七〇頁。同「中國民間演劇の現狀—紹興の蓮花落・鸚哥班・寶卷を中心に—」同第二十號、二〇〇五、二二—二三頁。上田望『紹興寶卷研究 付「雙狀元寶卷」校注影印』二〇〇七。同『紹興寶卷研究 2 付「雙英寶卷」校注影印』二〇〇九。同『紹興寶卷研究 3 付「沈香扇寶卷」校注影印』二〇一〇。小南一郎「中國近世の宗教文藝」『國學院雜誌』第一一七卷第十一號、二〇一六、一五八—一七二頁。前掲科學研究費報告書中のものと後の注に出るものは割愛した。

(4) 周作人『瓜豆集』北京出版集團公司・北京十月文藝出版社、二〇一二、三二—三十八頁、「劉香女」。

(5) 磯部祐子「生き續ける寶卷(上)・(下)」『東方』一八八・一八九、一九九六、二一五・一二—十五頁。

(6) 宣卷の實際については以下を参照。顧希佳「安昌宣卷調查報告」『紹興宣卷』前掲注3、一二〇—一二二頁。松家裕子「紹興宣卷の調查報告—現代中國における唱導文藝のひとつのありかた—」『說話・傳承學』第二十二號、二〇一四、二〇六—二二四頁。

(7) 車錫倫『中國寶卷總目』北京燕山出版社、二〇〇〇、二六六頁。

(8) 磯部祐子「紹興の寶卷—「三包寶卷」を中心に—」『桃の會論集』五集、二〇一一、五十七—七十二頁。松家裕子「紹興民間の「賣花寶卷」テキスト」『中國近世唱導文藝研究』前掲注2、三十八—六十六頁参照。

(9) 文益書局刊行の寶卷については、尙麗新・張一帆「清末民國文益書局石印寶卷始末」『寶鷄文理學院學報(社會科學版)』第四十一卷第四期(總一二二號)、二〇二一、四十九—五十八頁参照。

- (10) 寶卷中の紹興の方言については以下を参照。古屋昭弘「烏金寶卷に見る民國初期の浙東吳語」中國古籍文化研究所說唱文學研究班『烏金寶卷影印・翻字・注釋』中國古籍研究所、二〇〇三、五一―十頁。同「梅花戒寶卷に見る清末の浙東吳語」古屋昭弘・氷上正・王福堂共編『梅花戒寶卷影印・翻字・注釋』中國古籍文化研究所・說唱文學研究所、二〇〇四、七―十四頁。王福堂『梅花戒寶卷』中的紹興方言、同、十五―二十頁。石汝傑・宮田一郎『明清吳語詞典』上海辭書出版社、二〇〇五。閔家驥他『簡明吳方言詞典』同、一九八六。王福堂『紹興方言』語文出版社、二〇一五。吳子慧『吳越文化視野中的紹興方言研究』浙江大學出版社、二〇〇七。

- (11) 前掲注10古屋論文、王福堂論文参照。

- (12) 松家裕子『太平寶卷』の六種文本―兼論民間抄本の價值 王定勇主編『中國寶卷國際研討會論文集』廣陵書社、二〇一六、二〇九―二三四頁参照。

- (13) 中共張家港市委宣傳部・中共錦豐鎮委員會・張家港市文學藝術界聯合會編『中國・沙上寶卷集』上海文藝出版社、二〇一一、九三一―九五五頁、「太平寶卷」。

- (14) 『紹興宣卷』前掲注3、二十五頁。

- (15) 插花については、松家裕子「試探紹興宣卷的插花」『文化文本』第二輯、中信出版集團、二〇二三、一七六―二〇三頁参照。

- (16) 藤野眞子「中國江南における宣卷の上演状況」(佐藤仁史・太田出・藤野眞子・緒方賢一・朱火生編著『中國農村の民間藝能―太湖流域社會史口述記錄集2』汲古書院、二〇一一、一九―三六頁)、緒方賢一「吳江宣卷のテクストについて」(同、三十七―五十二頁) 参照。

- (17) 二〇一八年八月、福建省福州市における婚禮において、「喜娘」すなわち媒婆にあたる女性が豊かな口の技を披露するのを、實際に目にし、

耳にした。

- (18) 澤田瑞穂『増補 寶卷の研究』國書刊行會、一九七五、一九八頁、「太平趙素貞寶卷」提要。

- (19) 松家裕子「物語りの力を信じる者―魯迅と宣卷の紹興」『アジアの都市と農村』和泉書院、二〇一三、二一三―二四一頁参照。

- (20) 音樂學の分野で、中國における實地調査に基づき口承と書承の問題について考察した成果に、井口淳子『中國北方農村の口承文化 語り物の書・テキスト・パフォーマンス』風響社、一九九九がある。

- (21) では紹興の宣卷は文學史上さしたる役割を果たさなかったのか。これについて、筆者は魯迅の小説の搖籃の一つとなった可能性を考える。弟、周作人は隣家の宣卷を聞いたと言う。兄はそれを聴かなかつたのだろうか。もし聴いたなら、それはのちに書いた小説に影響を与えなかつたのだろうか。